

[2022年度 入選]

ジェンダー化された社会と男性の生きづらさに関する考察 — 「弱者男性」をめぐる言説と表象の分析から —

久光 美羽

【目次】

はじめに

第1章 研究の背景と目的

- 第1節 日本社会におけるジェンダー不平等と「男性特権」
- 第2節 特権と相反する生きづらさ
- 第3節 「男性性」をみるということ
- 第4節 研究の目的

第2章 「望まれる男性像」と、そこからこぼれ落ちる男性

- 第1節 望まれる男性像
- 第2節 「弱者男性」とは
- 第3節 「弱者男性」というラベリングが必要とされた背景
- 第4節 「弱者男性」のステレオタイプ

第3章 「弱者男性」と恋愛

- 第1節 現代における恋愛と結婚への意味づけ
- 第2節 「弱者男性」と女性
- 第3節 女性の上昇婚志向と「あてがえ論」

第4章 弱さを語れない男性

- 第1節 「弱さ語り」の表象
- 第2節 『ドライブ・マイ・カー』からみる“男性が正しく傷つく”こと

第5章 「弱者男性」の展望

- 第1節 「弱者男性」からの脱却は必要か
- 第2節 「弱者男性」の生きづらさと向き合う

おわりに

はじめに

筆者は、自らの経験や社会の動向を踏まえ、一年次から三年次にかけて、主に女性の生きづらさに焦点を当てた研究を進めてきた。しかし、現実社会では、フェミニズム運動が活発になればなるほど、異なる意見を持つ人々同士の分断やバックラッシュが起こってしまっている。こうした現状に疑問を抱いた筆者は、「なぜ性別を理由とした不平等・不均衡を解消しようとする運動が受け入れられないのか」という問いに対して、「昨今のフェミニズム運動では女性の抱える問題にばかり焦点を当てがちになり、男性の生きづらさが無視されているからではないか」という仮説を立てた。後に詳述するが、日本社会では男性は女性に比べて多くの特権を持っているとされながらも、特有の生きづらさを抱えていることが指摘されている。では、なぜ日本社会において男性は、特権的な立場にありながら、生きづらさやネガティブな感情を抱くのであろうか。彼らは何に苦しめられているのだろうか。本稿では、この問いについて考察したい。

第1章では、公式統計や先行調査の数値的データを用いて日本における男女の意識・実態の差異を整理し、その特徴を国際比較も視野に入れて分析・考察する。その作業を通じて、日本社会では男性が特権的な立場に置かれている一方で、男性特有の生きづらさが存在していることを明らかにした上で、今なぜ「男性学」に注目すべきかについて論じる。第2章では、先述の問題意識から、生きづらさを抱える男性たちを象徴するものとして近年注目されている「弱者男性」というキーワードに着目し、このキーワードの学術的・社会的定義や用いられ方を整理する。具体的には、関連する文献の調査やSNSでの言説調査を行う。さらに、第3章では、この「弱者男性」という言葉を語るにあたって特に重要視される“恋愛・結婚”という側面から、彼らの生きづらさについて考察する。第4章では、アカデミー賞国際長編映画賞を受賞した映画『ドライブ・マイ・カー』の分析を行い、男性の弱さ、生きづらさがどのように表象されているのかを調査する。第5章では、本稿第1～4章の考察をふまえた上で、「弱者男性」とは脱却すべきものかという論点に対して筆者の見解を論じた後、現代日本社会における男性の生き方の展望について考察する。終わりに、男性の生きづらさをふまえて、これからジェンダー平等を目指すために、我々は、そして社会はどうあるべきかを考えていきたい。

第1章 研究の背景と目的

第1節 日本社会におけるジェンダー不平等と「男性特権」

世界経済フォーラムは2022年7月に『The Global Gender Gap Report 2022』を発表した。そのうち、国内における男女格差を表す指数であるGender Gap Index、いわゆるジェンダーギャップ指数において、日本の総合スコアは0.650、順位は146か国中116位（前回は156か国中120位）であった。このジェンダーギャップ指数のスコアは、近年日本国内でも注目を集めるトピックとなっており、日本のスコアが先進国の中で最低レベルであることを問題視する声も多い。例年通り、健康や教育の分野においてはかなり順位の高い日本だったが、今回も経済・政治の著しく低い順位が総合スコアの足を引っ張る形となった〔World Economic Forum, 2022〕。下図は、内閣府男女共同参画局が刊行する『共同参画』2022年8月号の資料である。本図は『The Global Gender Gap Report 2022』を基に作成されており、ジェンダーギャップ指数日本スコアを、ランキング1位のアイスランドと全体の平均と比

較している。灰色で記された四点（経済参画：「管理的職業従事者の男女比」、政治参画：「国会議員の男女比」、「閣僚の男女比」、「最近50年における行政府の長の在任年数の男女比」）は特にスコアが低い項目である[内閣府男女共同参画局，2022]。

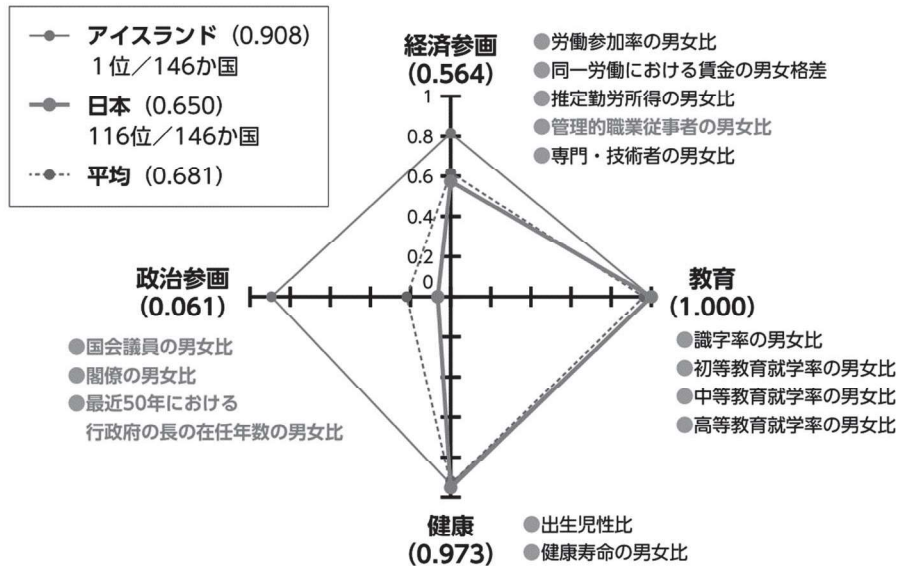


図1 ジェンダーギャップ指数のスコア比較[共同参画 令和4年8月号]

こうした順位を体現したと指摘される問題が、2021年に森喜朗氏が発した女性差別発言だ。当時、東京五輪・パラリンピック組織委員会の会長であった森喜朗氏が、評議会にて女性理事選出に関して話した際、「女性がたくさん入っている会議は時間がかかる」、「私どもの組織委員会に女性は7人くらいか。7人くらいおりますが、みなさん、わきまえておられて」と発言した。これに対して、森喜朗氏が発した「わきまえる」という言葉への抗議運動として、Twitterでは「#わきまえない女」、またその英語圏版として「#dontbesilent」というハッシュタグでのツイートデモが起り、国内外から批判が殺到した。こうした事例は2021年以前からも絶えず生じており、その実態からも、またジェンダーギャップ指数をはじめとする様々な国際比較データからも、日本は国内外から「男性優位の国」として認識されている傾向にある。

こうした現状を改善するため、国内では政治における男女共同参画への取り組みなどをはじめとし、様々な分野において格差是正措置が行われている。下記に、日本の男女格差とその是正措置について、先述の調査結果から問題視されている分野である(1)経済格差、(2)政治における格差の二点に分けて記述する。

(1) 経済格差

日本では、労働基準法4条による「男女同一賃金の原則」が定められているものの、内閣官房の調査において、(正規・非正規雇用の)日本のフルタイム労働者の男女間賃金格差は、他の先進国と比較しても大きい水準にあることが明らかとなっている[内閣官房 新しい資本主義実現本部事務局，2022]。こうした問題を受け、令和4年7月8日に女性活躍推進法に関する制度改正がされ、情報公表項目に「男女の賃金の差異」を追加するとともに、常時雇

用する労働者が301人以上の一般事業主に対して、当該項目の公表が義務づけられることとなった [厚生労働省, 2022]。また、賃金に関しては当人の企業内ポストが大きく関係しているが、厚生労働省が行った「雇用均等基本調査」の令和3年度調査結果では、従業員数30人以上の民間企業における女性部長相当職を有する企業割合は15.9%であった [厚生労働省, 2022]。

表1 企業規模30人以上における役割別女性管理職を有する企業割合の推移(%)
※平成23年度の[]内の割合は、岩手県宮城県及び福島県を除く全国の結果
[令和3年度雇用均等基本調査]

	課長相当職 以上(役員 を含む。) の女性管理 職を有する 企業	係長相当職 以上(役員 を含む。) の女性管理 職を有する 企業	(複数回答)			
			女性役員を 有する企業	部長相当職 の女性管理 職を有する 企業	課長相当職 の女性管理 職を有する 企業	係長相当職 の女性管理 職を有する 企業
平成15年度	48.3	62.5	33.6	6.7	20.2	32.0
18年度	53.0	66.6	36.6	8.8	21.1	32.0
21年度	54.5	66.9	39.5	10.5	22.0	31.6
23年度	[55.3]	[69.9]	[36.4]	[14.4]	[24.4]	[34.6]
25年度	56.0	68.8	33.9	12.9	28.6	35.2
27年度	59.0	70.5	40.0	12.7	26.2	33.9
28年度	58.8	71.0	38.5	13.5	27.1	32.0
29年度	60.5	69.7	36.3	16.1	30.2	32.4
30年度	59.2	70.2	36.5	14.7	30.9	37.0
令和元年度	53.3	65.5	28.2	15.5	30.5	34.9
2年度	58.8	70.5	30.2	16.6	34.3	36.7
3年度	57.6	70.4	29.6	15.9	31.2	36.0

こうした企業内地位の格差是正については、10年ほど前から国がアクションを起こしていた。平成26年8月28日に成立、翌年4月1日より施行した「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」、通称「女性活躍推進法」などがその例として挙げられる。しかし、令和3年度の「雇用均等基本調査」の結果からも読み取れるように、状況は好転していない。これを受け、昨今では企業自らが現状改善を目指す動きが見受けられる。実際に、民間企業内で女性役員数増加を目指すエンパワーメントが昨今のムーブメントとなっており、リクルートHDやSONYグループなどをはじめとした多くの大手企業で取り入れられている。

(2) 政治における格差

日本では、これまで女性首相が誕生していない。一昨年の自民党総裁選において、四人の候補者のうち、高市早苗、野田聖子と二人の女性候補者が名を連ね、女性の首相初就任の可能性が話題となった。しかし、結果的に岸田文雄現首相が総裁として選出され、初女性首相の誕生は先送りとなった。政治における男女格差は上位のポストに限った話ではない。前提として、日本における女性の議員数は非常に少ない。政府は、平成30年に国会議員の女性議員比率(衆議院9.9%)が、世界190カ国中163位とOECD諸国中最下位であったことを受け、男女の候補者数ができる限り均等となることを目指す法律を公布・施行した [男女共同参画局, 2022]。女性議員が議会に参画することで、現在の男性主権である政治

の体制を見直し、女性の視点や母親としての声を取り入れることを狙いとしている。だが、この施策も実を結んでおらず、令和4年版男女共同参画白書では、衆議院・参議院の両院において、議員総選挙における候補者及び当選者に占める女性の割合は上昇傾向にあるものの、依然として国際的に低い水準となっていることが明らかとなっている[男女共同参画局, 2022]。

上記のあらゆる格差是正措置は、多少の効果こそあれども、社会全体の風潮を一新するには至っていない。経済格差の面で言えば、(1)段落内で述べたように、企業に対して男女の賃金差異の開示が義務づけられたとしても、男女間に賃金格差があった際の罰則などは定められていないため、大きな効力は望めない。また、女性活躍推進を掲げる大手企業の中には、これを主に「イメージアップ活動」としている企業も多く、内容が伴っていないケースが見受けられる。そのため、現状では「女性のエンパワーメント」が一種の流行の域に留まっている。加えて、大手企業だけでなく、日本の中枢を支える中小企業における男女格差が解消されないことには問題解決に至らない。

また、政治分野において、女性議員数増加を目指す施策では、“女性ならではの視点を取り入れるため”というねらいからも透けて見えるように、女性を、一人の議員としてではなく、ジェンダーの色眼鏡を通して認識しており、問題の根本的な解決からずれてしまった印象を受ける。たとえば、男女共同参画の推進リーフレットには「女性の視点や母親としての声（女性の健康問題や中学校の給食センター立上げ、学校への扇風機の設置、保育所の待機状況の透明化等）」や、「女性には、女性の議員に対しての方が話しやすいことがある。」という理由が挙げられているが、これらの理由は女性議員の登用を推奨する理由として相応しくない[男女共同参画局, 2022]。優秀な男性が議員として選出されるのと同様に、ジェンダーとは関係なく、純粋に優秀な女性の議員選出機会を設けることを目指すべきだろう。確かに、クォータ制等の強制的な女性議員数（候補者数）の引き上げ措置は、先進国で多く取り入れられ、一定の成果をあげているが、「意識改革よりもまず制度を」としてしまう日本では、実装に幾分懸念が残る。また、現代日本の政治の場では世襲議員が多く、派閥も根強く存在する。そのため、男性が用意した席に女性を座らせるだけの取り組みでは、女性の政治的発言力向上につながらず、現在の「男性に権力が集中する構造」を壊すことはできないだろう。

また、構造的な男性の優遇・特権が露わになった例として、東京医科大学の不正入試問題が記憶に新しい。2018年、東京医科大学が、同学の入学試験で女子の得点を一律に減らし、男子の合格者が7割以上になるように操作していたことが判明した。平成の終わりに、未だこのような女性差別が横行することに衝撃を受けた人が多く、連日ニュースで不正入試問題が取り沙汰された。

しかし、こうして表出する大きな問題だけが男性の特権の現れではない。批評家の杉田は、近年「男性特権」という言葉が登場し、問題視される理由について以下のように述べている。

「男」たちは、無自覚なままに、そうした性差別的な構造の上であり、生まれながらの特権にただ乗りしている。つまり、「男」たちは最初から上げ底の「下駄」を履いてい

る。[杉田俊介, 男がづらい! —資本主義社会の「弱者男性」論—, 2022]

さらに杉田は、2020年代の差別批判では、男性が無自覚且つ日常的に特権の恩恵を受けている構造や、あからさまな女性差別主義者だけにとどまらず、それを看過する無自覚なマジョリティーに対しても責任を追求する論調があると指摘した。この指摘からは、現代日本において、男性は“生きているだけで”差別主義者としてのレッテルを貼られてしまうほどに、恵まれた「強者」であると認識されていることが分かる。そして、杉田が指摘したような男性を諸悪の根源とする論調は年々過激になっており、時にはフェミニズムとミサンドリー（男性嫌悪）をはき違えた主張も見受けられる。確かに、最初から上げ底の「下駄」を履いている男性たちは、女性に比べて恵まれているように見えてしまうかもしれない。しかし、分不相応な「下駄」を無理矢理履かされ、脱ぐことも選べない男性たちは、日々靴擦れに悩まされているのではないだろうか。

第2節 特権と相反する生きづらさ

先述の通り、公式統計・先行調査データや言説をみると、日本社会では男性は女性よりも様々な場面で特権を持っている（優遇されている）と認識されていることがわかる。そして、これらのデータや言説を見る限りは、男性は女性に比べ“生きやすい”ことが推測される。しかし、日本社会で生きる男性のうち、今現在が「幸せではない」と感じている者は多く存在している。OECDが2020年に行った調査によると、収入や安心感、政治への発言権などにおいて男性が女性より大きく優位でありながら、男性の社会的交流や職務ストレス、自殺・アルコール・薬物による死亡などは女性よりはるかに多いという逆転現象が起きている。また、OECD加盟国全体では女性は男性よりもネガティブな感情に陥りがちであるという傾向を示しているにもかかわらず、日本のみが、女性よりも男性において、ネガティブな感情に陥ることに関するポイントが高くなっている[経済協力開発機構（OECD）、2020]。

次に、「男らしさ」の影響に着目したデータとして、シェリル・サンドバーグ米国Meta（旧Facebook）前COOが創設した活動団体Lean In Orgの日本地域代表サークルであるLean In Tokyoが、11月19日の「国際男性デー」に先駆け実施した2019年の意識調査を取り上げる。調査対象者は全国のあらゆる年代の男性309人、調査方法にはオンライン上でのアンケート調査が用いられた。この調査では、普段見えづらい男性の生きづらさがあらわになった。調査結果によると、半数以上の男性が職場において「男らしさ」という固定観念やプレッシャーにより多少なりとも「生きづらさ」を感じていた。更に同サークルは、「DE&I推進に男性への配慮がない」と感じている男性は回答者の半数を超えていることから、男性の生きづらさ解消に向け

職場や学校、家庭などの場で、「男だから」という固定概念やプレッシャーにより生きづらさや不便さを感じることはありますか？（n=309）

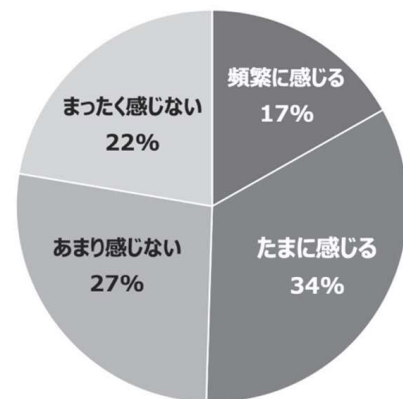


図2 男性が日常的に生きづらさを感じている割合

[男性が職場や学校、家庭で感じる「生きづらさ」に関する意識調査]

た積極的な活動が必要であると指摘した。ここで登場した「男らしさ」は重要なキーワードとなるため、第2章にて詳しく取り上げる。

※DE&Iとは、(ダイバーシティ(多様性)、エクイティ(公平性)、インクルージョン(包括性))を指す[一般社団法人Lean In Tokyo, 2019]。

こうした現状から、近年の日本社会では、男性の生きづらさや苦しみを表し、それらへの共感や解消に焦点をあてたコンテンツが増加し、多くの注目を集めている。(第4章では、そうしたコンテンツの一つとして、『ドライブ・マイ・カー』[濱口竜介, ドライブ・マイ・カー, 2021]を取り上げる。)

以上の通り、数々の先行調査や言説からは、日本社会では男性は女性に比べて多くの特権を持っているとされながら、一方で、特有の生きづらさを抱えていることが見出せる。では、なぜ日本社会において男性は、特権的な立場にありながら、生きづらさやネガティブな感情を抱くのであろうか。彼らは何に苦しめられているのだろうか。

この点について、田中俊之は、日本の代表的な「男性問題」として、「男性と仕事の強固な結びつき」と「男余りの結婚難」が挙げられると指摘している[田中俊之, 2015]。以下、田中の指摘した二点に着目し、日本における男性問題を整理する。

(1) 「男性と仕事の強固な結びつき」

前項でも述べたとおり、歴史的に男性は「公的領域を任される性別」として認識されている。昨今では、男性の育休取得推奨をはじめとし、男性のワークライフバランスを重視する流れが起こっている。だが実際のところ、仕事を二の次にする男性への風当たりは強く、男性は社会の流れやパートナーの女性などからの圧力との板挟みに苦しめられている。また、非正規雇用の増加により、就職難に見舞われる男性も多い。一般的に語られるニートやフリーターへの偏見からも分かるように、経済的な理由だけでなく「稼げない男」であることそのものに社会的なネガティブイメージがあるため、非正規雇用に関する問題も男性へのストレスであるといえる。

(2) 「男余りの結婚難」

昨今は非婚化・晩婚化が社会問題となっており、初婚年齢の上昇や生涯未婚率の増加が注目されている。本研究では、そうした社会構造に起因する「結婚難」について第3章で詳しく取り上げる。だが、田中はそれとは別に、男性の母数が女性の母数を上回っていることを指摘し、単純に男性が数として余ってしまうことを危惧すべきだと述べている[田中俊之, 2015]。この点についても具体的には第3章で述べるが、結婚の意味づけの変化や恋愛市場の活発化などにより、「結婚できない」という状態が一部の男性たちを苦しめていることは事実だ。さらに、(1)と同じく、パートナーが見つからないという状態だけでなく、「モテない男」という社会からのレッテルは男性たちの自尊心を傷つけ、大きなストレスを生み出していることが推測される。

以上、公式統計や先行研究から、日本社会において男性は女性よりも特権的な立場にありながら、男性特有の生きづらさを抱えていることを確認した上で、その生きづらさの背景に存在する複数の男性問題について整理してきた。これらを踏まえ、本研究では男性た

ちの生きづらさに着目し、複数の視点からその実態を分析していく。

第3節 「男性性」をみるということ

前項では、日本社会においては男性が特権的立場にありながら、一方で男性特有の生きづらさ、ネガティブな感情を抱えている傾向があることについて述べた。本項では、そうした「男性特有の」事象を分析・考察するにあたり、学術的な研究のアプローチとして「男性性」をみるということの意味と課題について、「男性学」を中心に提起し、検討しておきたい。

「男性学」という学問はそれほど歴史の深いものではない。「男性学」、そして「男性性」が注目されるようになったのは1990年代であり、当初は「女性学」と「女性性」の対になる学問として誕生した。だからといって、それまで男性たちが無視されていたというわけではない。それどころか、男性たちは人類史の中心に居すぎていたのだ。歴史的に、物語の主人公の多くは男性であり、人類史を見ることはそのまま男性史を見ることとほぼ同意義であった。それ故、わざわざ“男性”と名の付いた学問が議論されることは少なかった。しかし、時代の流れに伴い、女性がどのように生きてきたか／どう生きるべきか等が活発に議論されるようになると、「女性学」がジェンダー学の一つとして捉えられはじめた。このジェンダー学を語る上で、多様な性の在り方について言及されることが増え、意外にもブラックボックスであった「男性性」を捉え直す動きが強まったのである。阿部は、こうした昨今の「男性学」研究の潮流を受け、次のアクションとして、男性史を解明し、現在ほぼ女性史となっているジェンダー史と付き合わせていくことが必要だと指摘している [阿部, 大日方, 天野, 2006]。

男性学の定義について、上野千鶴子は「男性学とは、その女性学[男性中心的な視点から、女性を主体として奪いかえす試み]の視点を通過したあとに、女性の目に映る男性の自画像をつうじての、男性自身の自己省察の記録」[上野 江原, 1995]とし、伊藤公雄は、「〈男性学〉は、男性の視点から、この男性社会を批判的に解剖することを通じて、男性にとってより“人間らしい”生活を構想するための(それは、女性にとっても望ましいことだろう)“実的な学”」[伊藤公雄, 1996]と定義している。また、これらの言説を基に渋谷知美は、「両者に細かな違いはあるものの、どちらの定義を採用しても、①男性および男性社会を研究対象とする、②肯定的であれ否次のアクションとして、男性史を解明し、現在ほぼ女性史となっているジェンダー史と付き合わせていくことが必要だと指摘している [阿部, 大日方, 天野, 2006]。

以上をふまえ、本研究では、「男性」を人類そのものではなく、「女性」と同じくジェンダーを課せられた存在であるとして捉え、彼らの“性”を考察する。「男性性」を見ることは、「女性性」に加え、多様な性の在り方を見ることに繋がると筆者は考える。昨今の「男性学」では、古い「男らしさ」からの脱却や新しい男性像を目指すためのメソッドのようなものが多く語られているが、そもそも「男らしさ」とは何なのだろうか。なぜ男性たちは“新しく”ならなければならないのだろうか。もし新しくなるとすれば、それは一体彼らがどうなることを指すのか。その答えを探っていきたい。

第4節 研究の目的

上記の背景を踏まえた上で、本研究は、「なぜ日本社会では男性特有の生きづらさが生じているのか。男性たちを苦しめているものは何か」という問いに対し、本研究なりのアプローチによって解明することを目的とする。具体的には、「弱者男性」とされる人々の現状を分析し、彼らの展望を画策することに焦点を当てる。これを通して、昨今の男性を置き去りにしたフェミニズム運動に一石を投じ、フェミニズムを「女性による女性のための運動」から「誰もが生きやすい社会を目指して社会全体で取り組む運動」へと変化させるきっかけとしたい。

第2章 「望まれる男性像」と、そこからこぼれ落ちる男性

第1節 望まれる男性像

「弱者男性」というキーワードについて語る前に、日本において望まれている男性像や求められる男性の在り方について論ずる。なお、この節で取り上げる男性像や「男らしさ」は、「正しいもの」としてではなく、一般に認知された風潮として記述することを強調しておきたい。

阿部恒久は、シモーヌ・ドゥ・ボーヴォワールの『第二の性』より「人は女に生まれず、女になるのだ」という一文を引用し、これが男性についても言えるのではないかと指摘した〔阿部, 大日方, 天野, 2006〕。女性が皆この世に生を受けた時から奥ゆかしく従順な存在ではないのと同様に、男性も強く逞しく、リーダーシップを持って生まれはしない。では、「男らしさ」はどこから生まれたのか。以下、「歴史的な社会構造」、「男性自身による理想像の構築が引き起こす負の再生産」、そして「女性の存在」の三点に分けて考察する。

第一に、歴史的な社会構造が作り出した望まれる男性像について記述する。黒川みどりは、〈男らしさ〉は、女性に対して男性の優位を誇り、それを前提に性的役割分担を固定化するものとして機能してきたこと、また、それを制度的に支えてきたのが、日本の近代の場合には家父長制であったことを指摘している〔黒川みどり, 2006〕。近代以降の男性像を語る上で、家父長制や性別役割分担という語句は避けて通ることはできないだろう。無論、現代に至るまで〈男らしさ〉の概念は少しずつ変化しているが、根底には常に家父長制や性別役割分担的な社会構造が存在している。家父長制とは、家族に対する統率権が男性である家父長に委ねられた家族の形態を指すが、現代においても一般的に核家族の夫・父にあたる人物を「主人」と呼ぶ習慣があり、家父長制の名残が見受けられる。また、落合恵美子は歴史家たちの意見を参考にし、近代家族の特徴の一例として「男は公的領域・女は家内領域という性別分業がある」〔落合恵美子, 2019〕としているが、これも現代の「女性は社会進出をしてもなお、時短勤務を選び家事・育児を担う構造」を支えている社会規範だろう。これらの制度は、男性を女性より優位に立たせたが、その優位性と引き換えに“それ相応の強さ”を保持することを男性たちに強いた。言い換えれば、歴史的な社会構造により、男性たちは「公的領域で生き抜く力と決断力・実行力を持った強者」となることが望まれた。

第二に、男性たち自身が作り出した望まれる男性像について記述する。「男らしさ」や理想の男性像は必ずしも外部からの圧力で完成されるものではない。男性は“男性自身”でそれを常に再生産しているのである。多賀太は、男性たちが弱気になっている時、他者に「男だろ!」「おまえ、男だ!」と言われるとなぜか頑張ってしまう事象について、「弱い女性と

一緒にされる」という自尊心が傷つけられる行為を避けたい感情があると指摘している。そして、この感情の根源には戦時中の教育方針が影響していると述べた。戦時中の男児は皆「日本男子」の模範たれと、「女のようだ」と言われることは何としてでも避けるべきとされており、女性を貧弱な劣性とする女性蔑視は、彼らのなかに当然の価値観として刷り込まれたという[多賀太, 2022]。

こうした女性差別意識は当然許されるものではないが、彼らにとってこの「呪い」ともいえる呪縛的な規範は、ホモソーシャルで生き抜くために必要な術であったのではないだろうか。そして、自分を含めた“男”という集団に対して、何世代にもわたって呪いをかけ続け、遂には「誰が言い出したかは分からないけれども、男とはそういうものだ」という固定観念が確立されてしまった。彼らの呪いは「女性より男性が劣ってはいけない」という考えから、「男らしさ」を「弱みを見せない、女性より優れた存在たり得ること」としてしまったのである。

第三の望まれる男性像を作り出した要因として、女性の存在を取り上げる。上記で述べた例にも言えることだが、女性は多くの場面で男性より弱い立場に置かれやすい。その場合、女性は職場・家庭・地域社会等どのような環境であれ、権力者となる男性の能力による影響を多く受けてしまう。女性自身がその立場を受け入れているか否かは別として、自動的に自分たちよりも強い立場にいる男性がその立場に見合った能力を発揮しない場合は当然不満を感じるだろう。こうした女性の不満の声こそ、更に強力な理想の男性像を作る要因になってしまう。先述した第一、第二の形成要因からなる「男らしさ」を目指す男性にとって、女性から劣っているとみなされること、苦言を呈されることは最も屈辱的な事象である。これと同様に、女性から性的魅力を理由とした好意を得られないことも、「男らしさ」の尊厳を傷つけてしまう事象である。従って、女性に好かれ、尊敬される存在であること、世俗的な言葉で言えば「モテる男であること」はそのまま理想の男性像へと繋がるだろう。このように女性の存在は男性たちの価値、「男らしさ」のレベルに大きく関わっている。

第2節 「弱者男性」とは

前節で述べた「望まれる男性像」は日常的に男性たちを縛り、その男性像からこぼれ落ちる、あるいはこぼれ落ちないように踏ん張らざるを得ない男性たちに生きづらさを抱えさせる。

阿部のようにボーヴォワールの言葉を借りるのであれば、人は男に生まれるわけではない。社会の中で男になれる者もいれば、男になれない(ならない)者もいるだろう。しかし、実際にこのような規範は存在し、今もなお男性たちを縛り続けている。そして、それこそが本論で着目する「弱者男性」の生きづらさにつながっていると推察される。ただし、この「弱者男性」という言葉はインターネット上で用いられたのを発端として近年多用されるようになったものの、その定義ははっきりとしていない。杉田は、「弱者男性」という言葉について、「弱者」の定義は曖昧だが、その構成要素の候補として、「労働の非正規性」「収入」「容姿」「コミュニケーション能力」「パートナーの有無」の5要素を挙げている。

さらに、これらのいくつかの要素が組み合わさった“連立方程式的な「弱者性」”こそが、現実の「弱者男性」を表すのに適していると言及している[杉田俊介, 2022]。また、評論家の藤田は、マジョリティーであり強者であるとされる「男性」の中に存在する恵まれぬ者

や不幸な者を提示しているのが「弱者男性」と述べている[藤田直哉, 2021]。

その他、「弱者男性」の定義に言及する言説はいくつか存在するが、論者によって弱者の線引きが曖昧なため、本論では、上記の二つの例を参考にしつつ、「弱者男性」をあらかじめ定義せず、「弱者男性」という概念を、社会の様々な人々の相互作用で構築されている概念として捉え、この言葉・概念の用いられ方、そこに込められた社会的意味などを分析考察する。

第3節 「弱者男性」というラベリングが必要とされた背景

前節では、「弱者男性」という言葉は近年多用され始めたにもかかわらず、いまだ学術的にも一般的にも定義が曖昧である点について述べた。本節では、ではそのように曖昧であるにもかかわらず、人々が「弱者男性」という言葉を多用するのはなぜか、という点について考察する。こうした「マジックワード」が社会の中で流行するとき、それは多くの人々が抱えていた感情を端的に表した言葉であることが多い。昨今の流行で言えば「自己肯定感」や「コミュ力」などがその例に挙げられる。「なんとなくもやもやした気持ち」に分かりやすい名前がつくと、社会で確立した問題として認識することが可能になる。すると、当事者を発見しやすくなると同時に、当事者同士が連帯し、自身の抱える問題に対して声をあげやすくなる。望まれる男性像に関する節で述べたように、辛さや苦しみを個人として表出しづらい男性にとって、まさに「弱者男性」という言葉・概念は生きづらさの表明に必要なラベルなのではないだろうか。藤田は、「弱者男性」論とは、フェミニズムの隆盛へのカウンターとして登場した議論で、マジョリティーであり強者であるとされる「男性」の中にも、「弱者」性を持つ恵まれない者や不幸な者たちがいることを提示するものだと述べ、「弱者男性」という言葉が苦しむ男性たちを可視化する救いになったことを指摘している[藤田直哉, 2021]。実際に、男性の生きづらさはかなり前から指摘されていた問題であった。1970年代に隆盛した女性解放運動（ウーマン・リブ）と呼ばれる第二波フェミニズムから直接影響を受けた男性たちがメンズ・リブと呼ばれる運動を行い、日本でも全国各地で男性たちがグループを結成していた。しかし、年々活動団体も少なくなり、男性たちの生きづらさは解消されないままに、現在に至るまでその存在は影を落としていた。そこへ近年、「弱者男性」という言葉が登場したのだ。「強者＝男性」、「弱者＝女性」というステレオタイプが存在する社会では、「弱者男性」というチグハグに見える言葉は、人々の関心を集めるのに適していたと言える。

第4節 「弱者男性」のステレオタイプ

本節では、「弱者男性」とされる男性たち、または「弱者男性」という言葉そのものに対する社会的な認識について、SNS上の大衆的言説の分析を通じて考察する。前節までは、「弱者男性」という言葉が誕生した背景やその存在意義について記述してきたが、「弱者男性」が新出語句であることや定義が曖昧であることなどから、大衆的言説空間においてはそのイメージもかなりばらつきがあり、なかには過激なものも多い。以下は、「弱者男性」を語った言説の一部である。ここでは、「弱者男性」という言葉のより大衆的な用いられ方を把握するため、匿名性が高いSNSであるTwitterでの言説分析を行い考察する。対象期間は2022年11月7日から2022年11月11日である。対象ツイートは、「弱者男性」というワー

ドを含む公開ツイートとした。

「弱者男性」とは、当初は男性が女性よりも自殺率が高いことやホームレスになる比率が高いことなどを受けて論じられ始めた。日本において特権的立場にあるとされる男性は、女性に比べ恵まれている性として広く認識されているが、第1章で述べたとおり、実際には男性も生きづらさを感じており、男性だからといって、必ずしも「強者」であり「幸福」であるとは限らない。「弱者男性」という言葉は、そうした弱さを抱える男性及び彼らを取り巻く環境を社会問題として捉えるきっかけを生んだ。そうして人々に認識され始めた「弱者男性」たちは、主に匿名性の高いSNSを媒体として連帯を強めていった。ツイートではそうした連帯への認識についての言説が見出せる。

- ① 純粹なので「弱者男性」界限を障害や病気などの困難を抱えた男性たちの連帯なのかと思ってた時期があった

(@misakichankonai, 2022年11月11日 午後0:58)

このツイートでは、「弱者男性」という言葉が能力を含む“身体的な弱さ”を連想させると述べた上で、実際には「弱者男性」界限が、そうした弱さに苦しめられる男性像と乖離した集団になっていることを指摘している。この背景には、「弱者男性」の定義が広すぎることで、どんな人物であっても「弱者男性」に包括されてしまうため、いわゆる社会的弱者としての弱者性を持った男性と、そうでない男性が入り交じってしまう現状がある。では、「弱者男性」の実態はどのように移り変わったのだろうか。

「弱者男性」という言葉が広く認識されると、次第に「弱者男性」は大衆的に「モテない男性」と同義で用いられるようになった。この「モテない男性」が表す男性像とは、いわゆる「恋愛市場で女性に選ばれなかった男性」のことではない。同性を含む人間関係の構築もままならず、恋愛市場に参加することすら叶わない男性を指している。次のツイートでは、「弱者男性」の拡張と、そのイメージについて以下のように述べている。

- ② 「弱者男性」論、当初は自殺率やホームレスの男女比から福祉に包括されない属性がいる話だったのにいつの間にか単にモテないだけの人にまで拡張されてしまった感”

(@Sergei_Almost, 2022年11月7日 午後4:59)

- ③ 「弱者男性」という言葉の出どころと正しい意味は分からないけど、発達障害とかでコミュ力がかすで見目に気を使うこともできない(必要だと感じる頭も、実行できる体力も金も、それを稼ぐ手段もない)人のことだと思ってる。

(@nnknupn, 2022年11月11日 午前5:38)

- ④ 「弱者男性」とつるみたくない

(@kamaboko_log, 2022年11月11日 午後10:48)

この三件のツイートからは、前項で述べた「弱者男性」という言葉によって行われたラベリングの影響が読み取れる。「弱者男性」という言葉は男性たちの苦しみや辛さを可視化させたが、そのキャッチーさから、人々に一種の流行言葉として捉えられてしまった。そのため、社会問題としての認識を持たれることなく、言葉の誕生した背景とは関係のない「弱者男性」の使われ方が浸透してしまったと推測される。また、③、④のツイートから読み取れる「弱者男性」への偏見は凄まじい。該当ツイートのアカウント所有者の性別は不明だが、彼らが「弱者男性」という見えない敵に対して嫌悪感を抱いていることは明らかである。

次のツイートでは、この偏見によって生まれる「弱者男性」への嫌悪感について、「女性との関わり」という視点から考察する。

第3章にて詳しく取り上げるが、「弱者男性」にとって「女性」とは、非日常的であり、遠い存在として認識されていることが多い。中には、ただ遠いだけでなく、女性を敵対視してしまう男性やミソジニー（女性嫌悪）に陥る男性も存在する。下記のツイートではそうした男性への意見が述べられている。

- ⑤ 「弱者男性」って、女性に攻撃的かつ他責思考な人が本当に多い。弱者なんだからしょうがない！オンナはズルい！救わないお前らが悪い！←コレ。性欲云々じゃなくて、普通の人ならそんな人たちに近寄らないし、誰も救おうなんて思わないでしょ……
ねえ 他責思考、やめな～
(@ohimo_umai_3150、2022年11月7日 午前1:45)

このツイートからは、一部の女性が「弱者男性」と呼ばれる人々を忌避すべき存在として認識していることが読み取れる。現代に至るまで、弱者であることや弱さを隠して生きることを強いられてきた男性たちは、今「弱者男性」として連帯し、生きづらさを主張するムーブメントを起こしている。だが、弱者性を盾にして「私たちは助けられるべきだ」と声高に主張することは、ある種の強さを伴った行為とも言えるため、他者からは「弱者」に見えづらい。その結果、彼らの訴えは「傲慢なわがまま」として認識されてしまい、嫌悪されてしまうのではないだろうか。この問題の要因は、集団における一部の個人による言動の責任が、集団に帰結してしまった点にあると推測される。一口に「弱者男性」や「女性」といっても、同じ属性の人間だけが集まっているわけではない。昨今は多様性が魔法の言葉のように多用されているが、多様性とは決して「男性」や「女性」といったジャンル分けの器を増やすことではない。本来の多様性とは、「同じ器の中にいたとしてもそれぞれに違いがあり、一人として同じ人間はいないこと」を示す言葉ではないだろうか。ジャンル分けされた集団ばかりに注目し、個人に目を向けないことにはこの問題は解決しないだろう。

ツイート③、④、⑤のような「弱者男性」への偏見は後を絶たない。だが、実際に「弱者男性」が求めているものは何なのか。彼らは自らの弱者性にあぐらをかき、ただ愛をくれる世話役の女性がほしいだけなのだろうか。下記ツイートでは、「弱者男性」に抱かれる偏見を受けての主張がなされている。

- ⑥ “前にも言ったけど、「弱者男性」が求めているのは女ではなく、
・人権

- ・人間扱いしてほしい
 - ・まともに生活できる仕事や賃金
- なんだよ。”

(@tomonasisan、2022年11月7日 午後0:24)

ツイート⑥からは、「弱者男性」のネガティブイメージによって、彼らの抱える生きづらさが正しく認識されないことへのやるせなさを感じ取れる。さらに、このツイートでは、日本国憲法で定められた基本的人権と同等の権利を欲していることが表明されており、それすら守られていないと感じてしまうほど、彼らが苦しんでいることがわかる。加えて、「AではなくB」という文の構成や、女性ではなく「女」という書き方からは、男性にとって女性の存在がまるで嗜好品のように捉えていることがうかがえ、「弱者男性」と女性の距離が感じられる。

以上の言説は一部であり、必ずしも世間一般のイメージと直結するものではない。しかし、今回の調査で「弱者男性」を検索ワードとしてツイートを収集し言説分析を行ったところ、ポジティブな言説はほぼ皆無であった。つまり、社会において、男性が「弱い」ということそれ自体がネガティブに捉えられており、男性に向けられるジェンダー意識が非常に強いことが明らかとなった。この背景には、第2章第1節で述べた「望まれる男性像」の存在が関係していると推測される。多様性やジェンダー平等が謳われる社会においてもなお、男性たちは「強さ」を求め続けられ、「弱さ」語りを許されていないのである。

これらのツイート分析を踏まえ、「弱者男性」はその定義が曖昧であることから、語りを繰り返されるなかで対象の範囲が常に変化し、その齟齬が更に分断を生んでいることが見出される。さらに、「弱者男性」にはネガティブで攻撃的なイメージがあり、忌避される存在としても認識されていることがわかった。

昨年4月に文春オンラインにて公開された記事では、そうした世間のイメージを表すかのような内容が綴られた。執筆者の杉田は、『「真の弱者は男性」「女性をあてがえ」…ネットで盛り上がる「弱者男性」論は差別的か?』というタイトルのもと、「弱者男性」を悲観的に分析した。中には、「反差別的で脱暴力的な『弱者男性』はあり得るか?」など、度が過ぎた表現も多く、賛否両論の意見が寄せられているが、SNSで該当記事の引用件数が3,000件を超えるなど、注目を集めていることは事実である[杉田俊介, 2021]。この問題に対して、絶対的な悪は存在しないが、この社会に生きる誰もが、「弱者男性」の抱える弱者性はどのようにしてもたらされたのか、彼らの生きづらさの改善のためにどのような策を講ずるべきかを今一度考える機会を持つことが求められる。

以上が、SNS上で見出せる「弱者男性」に関する大衆的言説の様相である。次章では、「弱者男性」の定義またはイメージに深く関係している「恋愛と結婚」に焦点を当てて論じる。

第3章 「弱者男性」と恋愛

第1節 現代における恋愛と結婚への意味づけ

日本では、戦後半世紀の間に結婚の仕方が大きく転換した。国立社会保障・人口問題研究所の調査によると、戦前には約7割を占めていた見合い結婚は一貫して減少し続け、

1965～1969年頃に恋愛結婚と比率が逆転した。現在では結婚の9割近くが恋愛結婚となっており、異性との交際は結婚相手の候補者を得る前提となっていると言える〔国立社会保障・人口問題研究所 人口動向研究部, 2013〕。自由な恋愛のもとで交わされる結婚が主流になったことで、結婚が個人化され、必ずしも結婚は家同士の繋がりではないという考えも台頭してきた。また、結婚をしていない人に対して、未婚（＝まだ結婚していない）ではなく、非婚（＝結婚しない）という言葉を使うなど、結婚を必要としない生き方が一般に認知されはじめている。女性の社会進出により、女性が経済的に男性に依存する必要が失われたことも、非婚化要因の一つであるとする説もある。

しかし、依然として、結婚を誰しもが迎えるライフイベントだとする風潮も根強い。2017年、独身研究家でコラムニストの荒川は『超ソロ社会「独身大国・日本」の衝撃』を出版し、既婚者＝マジョリティとされる社会で、独身の人々に対して未婚を揶揄するソロハラメント、いわゆる“ソロハラ”が横行していることを指摘した〔荒川和久, 2017〕。

ソロハラは、当人には結婚をするか否か選ぶという権利があるにも関わらず、“結婚していないこと”を「結婚相手に選んでくれる相手がいない」と曲解し他者を侮辱する行為であり、セクハラの一つとして認識される問題である。

一方、当人が恋愛や結婚に意欲的であるものの、モテない・パートナーが見つからないことも往々にして起こり得る。いつの時代においても、モテ服やモテ仕草、モテテクニクなどのコンテンツは世の中に溢れており、他者にモテること、パートナーがいる人を「勝ち組」と称することも少なくない。そればかりでなく、SNSの普及などの影響により、パートナーの有無やステータスが、当人のステータスとしてそのまま組み込まれる構造も存在しており、現代の恋愛や結婚は、マズローの欲求5段階説において“社会的欲求”に含まれる愛や帰属の欲求に加え、一つ上位の段階である承認欲求も満たす要素を孕んでいるといえる〔Maslow, 1943〕。

また、近年は恋愛を目的としたマッチングアプリが多数存在し、多くの人々が利用している。モバイルマーケティングを行うMMD研究所の調査では、マッチングサービス・アプリを知っていると回答した1,986人に、マッチングサービス・アプリの利用について聞いたところ、「現在利用している」が32.6%、「過去に利用していた（現在は利用していない）」が45.7%と合わせて78.2%の利用経験があるとされている〔伊藤 南美, 2021〕。

上記を踏まえ、現代では恋愛や結婚が強制されてはいないものの、それらに関して興味がある又は意欲的な考えを持つ人は多く、恋愛や結婚をすることがスタンダードになっており、パートナーの存在が当人のステータスに深く結びついていることがわかる。

第2節 「弱者男性」と女性

ここからは、前節の現状を踏まえ、「弱者男性」と女性との関わりについて考察する。また、本論では取り上げる言説や先行研究に倣い、ヘテロセクシュアルのシスジェンダー男性についてのみ記述する。

先に述べたように、「弱者男性」には、弱者たり得る要素が幾つかあるとされているが、その中で脱却の難易度が最も不明確である要素が「パートナーの有無」だ。他の要素に比べ、目の前に「YES」と言う女性さえいれば、一瞬にして彼らは「弱者男性」を脱却できるからだ。だが、パートナーという存在はどれだけ策を講じたとしても確実に得られるものではなく、

その点では最も難しい要素であるといえる。彼らにとって「女性」とは一体どのような存在なのだろうか。

本節では、「弱者男性」を自称する男性たちの集団として、「ぼくらの非モテ研究会」の活動内容を取り上げる。この研究会は、関西を拠点とした男性たちの当事者研究グループであり、自称「非モテ」のメンバーたちが自身の経験や考えを持ち寄り、「非モテ」という現象について探求している。彼らの著書である『モテないけど生きてます 苦悩する男たちの当事者研究』(2020)から、「弱者男性」が女性をどのように捉えているか、女性とどのように関わってきたかについて記述する。

彼らは、自称「非モテ」である自分たちが学生生活や職場において、コミュニケーション能力の低さ故に、友人が少なく、人との関わりが薄い孤独な状態であったことを語っている。長年蓄積した経験によって深い劣等感を抱き、たとえ自らを「望まれる男性像」へと近づけるために努力を重ねたとしても、満たされない欲望に蝕まれてしまうという。なお、ここでいう努力とは、魅力を得るためにファッションにこだわることや、筋トレをすることを指す。そうした毎日を送る彼らが希望を見いだす先、それが「女性」との関係である。非モテ研究会のなかでは、しばしば「女神」という言葉が使われる。ここでの「女神」とは、自分に振り向いてくれる、優しくしてくれる女性を指す。この言葉一つとっても、彼らにとっていかに女性が遠い存在であるかが窺えるが、自己否定の塊の様な彼らにとって、自らを肯定し優しくしてくれる女性は「人生の一発逆転」を狙える神様のような存在なのだ。「女神」を前に、彼らは様々なアプローチを試みる。プレゼントを送り、会いにいき、思いを一心にぶつけるのだ。しかし、彼らにとって「女神」である女性は多くの場合、ただ優しいだけの人であり、女性は突然起こる好意のない相手からのアプローチに戸惑う。彼らは実際に行った過激なアプローチのエピソードを以下のように語っている。

- ① 「毎日のように彼女のアルバイト先に贈り物を、高いケーキとか、毎回三千円ぐらい使ってたんですよ」
- ② 「ストーカーみたいなことをして、その人がお昼ご飯に食べたパンのゴミを持って帰るみたいな」
- ③ 「抑えきれなくなって告白をしてしまって、断られたにもかかわらず、連絡とかしてほしくなさそうなのに、連絡しちゃうたりしますね」

彼らの語りにおけるアプローチはもはやアプローチの域を逸している。

①では、プレゼントを送ることで気を惹こうとしたエピソードが語られているが、交際していない相手からの一方的な貢ぎをポジティブに受け入れる人はそう多くないだろう。むしろ、見返りを求められているようで相手に恐怖を与えている可能性が高いといえる。

②では、文中にて「ストーカーみたい」と綴られているが、他人のゴミを勝手に持ち帰ることはれっきとしたストーカー行為であり、そうした自分自身の行動の愚かさに気づけていない点に問題が感じられる。

③では、嫌われていると分かっているにもかかわらず、どうしてもなく連絡してしまうことが語られているが、こうした身勝手な行動によって植え付けられた、被害者女性の恐怖は計り知れない。これらのエピソードのような「贈り物を受け取るように要求する」、「拒まれたにも

かわらず、連続して、電話をかける」等の行為はストーカー規制法にふれるほど過激な行為である。

彼らが犯罪を行っている意識があるかは不明だが、その行為について話すことを単なる「非モテ語り」としている時点で、彼らの身勝手さや女性への不敬さが感じられる。とはいえ、彼ら自身もそうしたアプローチが功を奏さないことについては理解しているという。理解しているにも関わらず、抑えが効かず気持ちが暴走してしまうのだ。『モテないけど生きてます 苦悩する男たちの当事者研究』（2020）では、こうした行為の結果「またうまくいかなかった」という挫折経験と罪悪感を覚え、更なる自己否定が生まれてしまうことを指摘している[ぼくらの非モテ研究会, 2020]。

上記の言説からは、「弱者男性」が持つ対女性コミュニケーション能力の低さが窺える。しかしながら、女性は男性と同じ“人間”であり、決して特別な存在ではない。基本的な関係構築のフローに性差はないはずだ。であれば、対女性コミュニケーションがうまくいかない問題の要因は、彼らが“女性”を「人」として見るよりも先に、「異性」として見ていることにあるだろう。

第4節 女性の上昇婚志向と「あてがえ論」

前節の内容を踏まえ、ここからは主に「弱者男性」の結婚について記述する。

「弱者男性」論を語る上で、時折「あてがえ論」という言葉が登場する。「あてがえ論」を簡潔に説明すると、「制度として「弱者男性」に女性をあてがえ」とする論である。この論では、近代において一般的であった「強者であった男性が結婚し弱者の女性を扶養する」関係のように、現代において強者女性は「弱者男性」のケアを積極的に行うべきだと主張している。「あてがえ」という言葉からも汲み取れるように、この主張は女性をまるで「モノ」のように捉えており、非常に差別的だ。従って、本論ではこの「あてがえ論」を支持しない。だが、実際にこうした考えが流布した背景を捉えることは「弱者男性論」を語る上で重要であるため、本節では「あてがえ論」と、その論と関連性の高い「女性の上昇婚志向」についても記述する。

第2章1節でも述べたとおり、近代の結婚では、家父長制の影響から「男は公的領域・女は家内領域」という性別分業があったため、収入や社会的地位等において男性が女性を上回る夫婦関係が一般的であった。女性は配偶者となる男性の「家」に「嫁」に入ること、名字の変化とともに身分の高い男性の付属品となる。これを「上昇婚（ハイパーガミー）」と呼ぶ。「上昇婚」は身分の差が顕著ではなくなった現代においては「自分よりも学歴、収入、社会的地位の高い相手と結婚すること」を指す言葉へと変化を遂げ、世間一般に共有される価値観となっている。

そして、時代の流れに伴う女性の進学率増加や社会的地位向上に大きな影響を受けなかった上昇婚志向は、次第に「弱者男性」と強者女性の結婚難へと繋がっていく。強者女性は、母数の少ない“自身より優れた男性”を求めることで、競争率が高くなり結婚難に陥る。一方、「弱者男性」は強くなってしまった女性たちから恋愛対象外とされてしまうことで結婚になかなかありつけない。先述の「あてがえ論」とは、こうした現代の社会構造から生まれた論である。

もしも、人を「駒」として考えるのであれば、この論は筋が通っているのかもしれない。（無

論、強者女性と「弱者男性」が自然に結婚するのであれば全くもって問題ではない。)しかし「あてがえ論」は、「弱者男性」の支援策として間違っている。仮に「弱者男性」たちに強者女性を“あてがう”制度を構築したとしても、それは女性差別的であると同時に、男性を馬鹿にした陵辱的行為であるからだ。前節の語りで登場したような男性たちが、女性を制度として“プレゼント”されたところで彼らの中にある劣等感や自己否定の感情はおそらく消えない。それどころか自分を更に惨めに感じてしまうかもしれない。仮に、「上昇婚志向を原因とした結婚難」という問題の根本的な解決を目指すのであれば、まず「公的領域での労働」と「家内領域での労働」の平等性を広めることで社会における性別役割分業の意識・体制を是正すべきである。そして、両者合意の基で夫婦間の労働を分け合う関係性を一般的とすることが求められるだろう。強者や弱者といったラベルを取り払い、将来を共にするパートナーとして相応しいかに焦点を当てることで、結果的には下降婚を選ぶ人々も増加する可能性がある。

第4章 弱さを語れない男性

第1節 「弱さ語り」の表象

第1～3章では、「弱者男性」の“弱さ”の分析や、「弱者男性」の現状について論じてきた。本章では、「弱者男性」がどのように表象されているかを論点とする。表象分析を用いる目的は次のとおりである。第2章1節で述べたように、男性は「男らしさ」への囚われにより、女性に比べて「弱さを“見せる／語る”行為」が容易ではない。男性は自らの辛さや苦しみを表出しづらいという特徴を持つ傾向にあるが故に、それらの辛さや苦しみの状態・要因を社会問題として捉える機会を失い続けている。そうした社会において、男性の弱さに焦点を当てた創作物は、自ら語る事が難しい男性たちの声を代弁する役割を担っている。従って、本章では表象分析を行うことで、登場人物に寄せられた男性たちの弱さに耳を傾けたい。

今回は、男性の心情に注目した作品として、映画『ドライブ・マイ・カー』(2021)を取り上げる。本作は、アカデミー賞国際長編映画賞を受賞するなど国内外から人気を博した。本作品では、原作・監督・脚本のすべてを男性が担っている。以下では、本作品を取り上げ、主に、主人公の家福を中心として、「男らしさ」や「男性の弱さ」がどのように表象されているかを分析する。

第2節 『ドライブ・マイ・カー』からみる“男性が正しく傷つく”こと

濱口竜介監督による映画『ドライブ・マイ・カー』は、公開当初こそ上映館も少なく、注目度が高い作品ではなかったものの、本作がアカデミー賞国際長編映画賞を受賞した影響を受け、少しずつ人気を集め、国内外から高い評価を得た。本節では、作中で、男性性を強く表象しているシーンを数カ所抜粋して取り上げる。また、本作では、チェーホフの戯曲『ワーニャ伯父さん』が登場するが、この戯曲は物語やキャラクターと重要な関係にあるため、こちらについても記述しておく。

まず、本作品と重要な関係にある『ワーニャ伯父さん』のあらすじを述べる。『ワーニャ伯父さん』とは、1899年にチェーホフが書いた戯曲である。この作品の主な登場人物は以下の通りである。

- ・ワーニャ：土地の元所有者であったが、今は金も仕事も持たない独り身
- ・セレブリャコフ：ワーニャの妹ヴェーラと結婚し、家と土地を手に入れた権力者
- ・ソーニャ：ヴェーラとセレブリャコフの娘であり、ワーニャの姪
- ・エレーナ：ヴェーラの没後の、セレブリャコフの後妻
- ・アーストロフ：セレブリャコフの主治医

ワーニャとソーニャは、傲慢なセレブリャコフによって土地と金を奪われ、彼のために働くだけの貧しく寂しい生活を送っていた。そして、ワーニャと医師のアーストロフは、年老いたセレブリャコフには似合わないほど若く美人な妻であるエレーナに惹かれていた。しかし、エレーナはアーストロフに少し浮気をするものの、セレブリャコフを選ぶ。エレーナから相手にされなかったワーニャ、そして密かにアーストロフを思っていたソーニャは報われない人生を送る。

次に、『ドライブ・マイ・カー』導入部分について概略を述べる。本作の主人公である舞台俳優兼演出家の家福（かふく）は、妻である音（おと）の不倫を知りながらも、彼女に訴えることができないでいた。ある日、音から話し合いがしたいという申し出があったにも関わらず、家福は無駄なドライブをして帰宅時間を遅らせてしまった。夜遅く帰宅した家福が目にしたのは、くも膜下出血を起こし帰らぬ人となった音の姿であった。

以下、本研究と関連の深いシーンを取り上げ、分析考察を行う。

【シーン1】

音は、家福を愛していながらも仕事仲間の高槻（たかつき）と不倫をしていた。ある日、家福は自らが仕事へ出かけた後に、仕事のキャンセルがあったため家に戻ったが、その際、音が自宅へ高槻を招き入れ、彼と性行為を行う様子を目撃していた。家福は、ただ静かに玄関のドアを閉めて一人ホテルへと向かった。

本来であれば、愛する妻が別の男性と不倫をしていること、そしてそれを目撃することは、非常にショックな出来事だ。しかし、彼は一切取り乱さない。直接問い詰めることも、一人で泣くこともしない。ただ、少し曇った表情になり、ライターの火がうまく点けられない描写があるだけだ。このシーンからは、家福が自分の本心をむき出しにすること、加えて音の本心を聞くことを恐れている様子を読み取れる。家福はプライドが高く幾分高慢な男であったが、それと同時に音の前では頼りがいのあるジェントルマンを演じていた。彼にとって、自らの弱い部分をさらけ出すように、泣いてしまうことや、音に怒りをぶつけることは「男らしさ」に反するため、このようなシーンになったと推察できる。

次に、音の不倫について、現実社会の様相と照らし合わせて考察する。近年、「サレ妻／サレ夫」という言葉が主にSNS上でよく使用されるようになった。「サレ」とは不倫“され”たことを意味し、「サレ妻」は夫に不倫された妻、「サレ夫」は妻に不倫された夫を指す。この言葉は、自分のパートナーの不貞に気がつきながらも、相手を問いただすことができず苦しむ既婚者たちが、「サレ」を自称することで同じ境遇の人々となつながら、その辛さを共有するために使用されている。彼らがSNS上で助けを求める背景には、配偶者の不貞行為が、

離婚や別居につながる非常にストレスの大きい事象でありながら、身近な人間に相談しづらい内容であることが関係している。夏目誠が行った調査によると、生活上の出来事におけるストレスのランキングでは、3位「親族の死」に次いで4位「離婚」、5位「夫婦の別居」が挙げられており、ことの重大さがうかがえる[夏目誠, 2008]。このことから「サレ妻／サレ夫」は大きなストレスを感じる事が分かるが、本シーンで音の不倫を目の当たりにした後も、家福はそれを誰にも打ち明けない。家福が「サレ夫」であったにもかかわらず、一人で悩んでしまった背景には、音と仕事だけに依存していた家福の孤独が関係している。作中に家福の友人や音以外の家族が一切描写されないことは、まさに「濡れ落ち葉」と称される日本中年男性の典型的な(仕事と妻以外に依存先がない)特徴を表している。

【シーン2】

音の死から数年後、家福は戯曲『ワーニャ伯父さん』を原作とした舞台の演出を務めることになった。その出演俳優オーディションを行うと、生前の音の不倫相手である高槻がアーストロフ役を希望し、オーディションに参加してきた。高槻はオーディションにて、自らの担当患者の妻である美しいエレナに強引な態度で迫る医師のアーストロフ役を熱演した。しかし、家福が高槻に与えた役はアーストロフではなく、音がなくなってしまった頃に家福自身が一度演じたことのある“ワーニャ役”であった。

戯曲の中で、アーストロフは、最後こそエレナに選ばれないものの、強く迫りエレナの気持ちをかき乱していた。この点から、音はエレナをイメージして表象され、音に迫り不倫をしていた高槻はアーストロフをイメージして表象された人物であることが窺える。そして、家福が高槻をアーストロフ役からワーニャ役に当て直したことには、家福による何らかの思惑が感じられる。また、ワーニャは、現実を直視することを恐れ、悲しみを消化できない点などから家福とリンクしている。ワーニャはこれまで本論で述べた「弱者男性」に近い男であったが、家福もまた、愛する人と結婚していても、仕事で認められていても、音の気持ちを深く理解できない悲しみと弱さを持ち合わせていた。さらに、家福は以前ワーニャ役を演じていたが、彼はワーニャを演じると、自らの中にある弱さがチェーホフのテキストに引きずり出され、弱さと向き合わざるを得なくなってしまうと感じていた。実際に家福は、ワーニャがエレナのことを話す台詞を言っている最中、舞台の上で音を思い出して泣いてしまったこともある。家福にとって、ワーニャを演じることは、実生活で自分が封じ込めている感情に向き合うことであり、できることならば演じたくない＝向き合いたくないと考えていたと推察する。

【シーン3】

その後、家福は高槻と語るバーのシーンで「チェーホフは恐ろしい。彼のテキストを口にすると自分自身が引きずり出される。感じないか？そのことにもう耐えられなくなってしまった。そうなるともう、この役に自分を差し出すことができない。」と述べた。更に、高槻をワーニャに配役した理由については「君は自分を上手にコントロール

できない。社会人としては失格だ。でも役者としては必ずしもそうじゃない。オーディションの君も、この前だって悪くなかった。君は相手役に自分を差し出すことができる。」と述べた。

アーストロフが自分に合っていると考える高槻に対して、家福はこの苦しいワーニャ役を渡す。家福はワーニャ役を高槻に演じさせることで、自分やワーニャの抱える気持ちが君の中にもあるはずだと高槻に訴えていたのではないだろうか。高槻は音の不倫相手であったが、家福にとって彼は憎い存在ではなかった。音が不倫をした理由と高槻の魅力は関係がないものだったからだ。音の不倫相手は複数存在したが、音は家福を誰よりも深く愛していた。音は、家福との夫婦関係では補えない何かを埋めるために不倫をしていただけであり、高槻を含む他の男性を愛していたわけではなかった。この点を踏まえた上で、他のシーンからも類推するに、家福と高槻の関係にいがみ合う要素はあまりなく、むしろ俳優としての師弟関係や、ブラザーフッドに近いものがあったことがわかる。

しかし、家福が高槻との会話で、弱さをさらけ出すように語ることはなかった。これは、自らの弱さや辛さを同性にさえ相談することができないという男性の特性を表している。実際に、内閣府男女共同参画局が行った調査では、悩みや困りごとを解決できずにひとりで抱え込む傾向は女性よりも男性のほうが強いことが明らかになっている [男女共同参画局, 2010]。このシーンでは、男性は女性からの評価を気にするだけでなく、親しい男性同士であっても己の「弱さ」を露呈することに抵抗があることを暗に示している。

また、このシーンでは家福だけでなく、高槻の男性性も表象されている。高槻は音との不倫に加え、以前所属していた事務所を未成年女性とのトラブルで退所、エレナ役の女優ジャニスと関係を結ぶなど、恋愛強者として描かれている。それと同時に、稽古の本読みで何度も注意されいらだつ姿や、バーで盗撮をしていた客に強い語気でまくし立てる姿など、攻撃的な性格も彼の一面として登場する。家福は、軽率でカッとなりやすい高槻を何度も窘めるが、それでも高槻は止まらず、最終的には盗撮犯を殴り殺してしまう。昭和的な男らしさと暴力性を持ち合わせた高槻は、辛さに蓋をして耐え抜く家福と相対する人物として表象されており、上手く生きることができない不器用さや自分をコントロールできない幼稚さが、男性への皮肉として描かれている。

【シーン4】

高槻が事件を起こして舞台を降板し、家福は自分が代わりにワーニャ役を演じるかを悩む。考える時間をとるために走らせた車内にて、家福はドライバーのみさきに音が死んだ日のことを語る。

「音が死んだ日、出がけに彼女が帰ってきたら話がしたいと言った。柔らかな口調だったけど決意を感じた。なんの用事もなかったけど、ずっと車を走らせ続けた。帰れなかった。帰ったらきっと、もう同じ僕たちでは居られないんだと思った。深夜に帰ると音が倒れていた。救急車を呼んだけど、意識はそのまま戻らなかった。もしほんの少しでも早く帰っていたら、そう考えない日はない。」

「僕は妻を殺した。」

家福は、愛する音が自分のことも深く愛しているを感じていた。それ故、自然に裏切る彼女の本音を聞くことが恐ろしかった。本当はどう思っているのか、どうしてそんなことをするのか、音の口から語られる現実を受け止められる強さがなかったのだ。しかし、その恐れと弱さ故に、音は帰らぬ人となってしまった。音が倒れたのはいつのことか、家福が車を無駄に走らせず真っ直ぐ帰っていたら間に合ったのか、それはさほど重要ではない。作中に登場するチェーホフのテキストを借りるのであれば、「真実というのはそれがどんなものでもそれほど恐ろしくはないの。いちばん恐ろしいのはそれを知らないでいること」であり、家福が、真実を知りたくないと思ったばかりに、音は死んでしまった。家福は弱かったのだ。

本作において、家福自身にモノログとして語らせる場面は存在しないが、その代わりに家福の心情をチェーホフのテキストを使用することが多い。これは、人生をただじっと堪え、自らの弱さから目を背けてしまう男性のリアルな姿を表象することに適していたためであると推察する。

次に、車内における家福とみさきの位置関係に注目する。二人の車内での位置関係について、濱口竜介監督は、「運転手の視界に入りづらいポジション(後部座席)の方が、運ばれる人は安心でき、最初から助手席では近すぎる。」「助手席に座る関係性というのは、多少異なる意味合いを持つと思うので、それは物語の進行に合わせて取っておこうと。」と述べている [濱口竜介, 2022]。実際に、シーン4に至るまで、家福とみさきはそれぞれ後部座席と運転席に座り、お互いの顔を見ずに前を向いて話していた。ほどよい距離を保っていた二人が、このシーンでそれぞれ運転席と助手席に座り、物理的な距離を縮めたことは、精神的な距離が近づき「弱さ」語りの環境が整ったことを表している。

【シーン5】

家福とみさきは、みさきの故郷である上十二滝村に訪れ、それぞれの家族を殺してしまった過去を振り返る。みさきは、家福に「家福さんは音さんのこと、音さんのその全てを本当として捉えることは難しいですか。ただ単にそういう人だったと思うことは難しいですか。家福さんを心から愛したことも、他の男性を限りなく求めたことも、なんの嘘も矛盾もないように私には思えるんです。おかしいですか。」と告げた。家福は、みさきの言葉を受け、自らを省みて、こう述べた。

「僕は、正しく傷つくべきだった。本当をやり過ごしてしまった。僕は深く傷ついていた、気も狂わんばかりに。でも、だから、それを見ないフリをし続けた。自分自身に耳を傾けなかった。だから僕は音を失ってしまった、永遠に。今分かった。僕は音に会いたい。会ったら怒鳴りつけたい、責め立てたい。僕に嘘をつき続けたことを。謝りたい。僕が耳を傾けなかったことを。僕が強くなかったことを。帰ってきてほしい。生きてほしい。もう一度だけ話がしたい。音に会いたい。でももう遅い。取り返しがつかないんだ。どうしようもない。」

二人を乗せた赤いサーブ900が上十二滝村に到着した頃、作品は少しのあいだ無音の時間に包まれる。この無音は、二人が現世から少し離れ、お互いの辛さを共有するための異

空間へ入ることを示唆している。銀景色のなか、二人は車を降り、演出家とドライバーという関係性からも離れ、互いに一人の人間として、自身の「弱さ」を語りはじめる。また、このシーンにおいて、家福とみさきは向き合った状態かつ手を握り合った状態で話を始めており、シーン4にて距離を縮めた二人の位置が表す関係よりも、更に親密な関係になったことがわかる。

音との関係が壊れてしまう可能性を恐れ、真実を知ることを恐れ、音の気持ちを正面から聞けなかった、それが家福の「弱さ」だった。家福の「正しく傷つくべきだった」という言葉は、そのまま本作のテーマになっている。本作において表象された「弱さを抱えること」、「現実と向き合うことができず苦しむこと」、「それを誰にも打ち明けられないこと」は、なにも家福に限った話ではない。これは男性全般に対しての問題提起になっている。家福は、このシーンにおいて、みさきの前で涙を流しながら自らの「弱さ」を吐露し、自覚して受け入れた。これは本作が提示する「男性の弱さ」への対処法の一つである。

また、ここでのみさきの存在は戯曲におけるソーニャとリンクしている。ワーニャとソーニャ、そして家福とみさきは、恋愛関係でもなく親子関係でもない。ただ共に生きる存在として互いを支えている。また、どちらも二人が男女であることは、ブラザーフッド／シスターフッドとは異なる関係性を提示するためであった可能性も考えられる。

【シーン6】

自らの弱さに真っ直ぐ向き合った家福は、再びワーニャとして舞台上上がった。『ワーニャ伯父さん』最終幕、この先の生き方について、ユナ演じるソーニャが韓国手話を用いて家福演じるワーニャに説く。

「ワーニャ伯父さん、生きていきましょう。長い長い日々と長い夜を生き抜きましょう。運命が与える試練にもじっと耐えて。安らぎがなくても。今も、年をとってからも、ほかの人のために働きましょう。そして最期の時がきたら大人しく死んでいきましょう。そしてあの世で申し上げるの。あたしたちは苦しみましたって、泣きましたって、つらかったって。そうしたら神様はあたしたちを憐れんでくれるわ。そして伯父さんとあたしは明るくて素晴らしい夢のような生活を目にするの。あたしたちは嬉しくて、うっとり微笑みを浮かべて、この今の不幸を振り返る。そうしてようやくあたしたちほっと一息つくの。あたしそう信じてる。強く心の底から信じてるの。その時がきたらあたしたち、ゆっくり休みましょうね。」

ユナ演じるソーニャは、家福演じるワーニャを後ろから抱きしめるような体勢をとり、ワーニャの前に手を出し、時折ワーニャの頬や胸を使いながら手話を紡ぐ。こうした表現から、このシーンにおいて手話を用いた理由は、ソーニャの言葉を、聴覚で認識する言語としてではなく、ワーニャ自身の体に直接取り込む救いとして表現するためであったと推察できる。（なお、話が逸れてしまうため、手話を一種のパフォーマンスとして消費することの是非については語らないこととする。）

また、この語りは、ワーニャを通して家福に、さらに本作を鑑賞する男性たちに届けられている。自らの弱さを他者に訴えず、辛さや苦しみを無理に取り除こうともせず、ただ

耐えて、生が終える瞬間を静かに待つ。決して、今の自分を良くすることは目指さず、苦しい生活を苦しいままに甘んじる。人のために生き、自らを優先させることなく人生を終える。本作において、チェーホフのテキストは家福の心情を表すために多用されていたが、ここでは現代において「弱さ」を語るができず苦しむ男性たちへの救いとしての役割を担っている。加えて、先述したシーン2, 3では、家福がチェーホフのテキストに自身を引きずり出される恐怖が語られていたが、ラストシーンでの家福は一転してチェーホフのテキストを受容している様子が描写されており、みさきに「弱さ」を語ったことで、家福が自分自身と向き合うことへの抵抗がなくなったことが読み取れる。

以上、シーン分析を通して、本作において「男らしさ」や「男性の弱さ」がどのように表象されているかを考察した。

『ドライブ・マイ・カー』における男性性の表象では、リアリティを重要視しており、家福をはじめとした登場人物たちは多くを語らない。その代わりに、『ワーニャ伯父さん』のテキストを使用することで、そのテキストを聞く表情や、役を演じ台詞として語る葛藤を描き、キャラクターの心情を表現していた。また、本作は2時間59分をかけて物語が進んでいる。大抵の邦画が約2時間程度であることに比べると、本作がかなり長編の作品であることが分かる。この点について、杉田は「主人公の家福が長い時間をかけて自身の「声」に耳を傾けたように、ぼくたちもまた長い時間をかけて自分の「本心」と向き合っていかなければならないと述べている [杉田俊介, 2022]。つまり、家福をはじめとしたキャラクターたちに時間をかけて少しずつ「弱さ」への対処、そして「正しく傷つくこと」を行わせることで、観客たちに「弱さと向き合い、自分自身を見つめる時間」の疑似体験を与えているのである。本作のように男性の生きづらさに焦点を当てた作品は、孤立した「弱者男性」たちへ向けて気づきや学びをもたらし、社会へ向けて彼らの声を代弁する役割を担っているといえるだろう。

なお、本作の原作『女のいない男たち』に収録された短編『ドライブ・マイ・カー』では、演劇のシーンがなく、家福が涙を流しながらみさきに「弱さ」を吐露するシーンも存在しない [村上春樹, 2014]。従って、映画化にあたって追加されたオリジナルシーンは、表象を行う側の考える男性性を、現代の男性問題に即した形で表した結果であるといえる。

第3節 正解としての「受け入れ」と適解としての「耐え」

前節では『ドライブ・マイ・カー』の表象分析を行ったが、ここで、弱さへの二つの対処法が見いだされた。それが「受け入れ」と「耐え」だ。二つは似て非なる方法である。上十二滝村での家福の言動は受け入れ、ワーニャとソーニャのこれからの生き方は耐えと表現できる。

「受け入れ」では、第一のステップとして弱さと向き合うことが求められる。自らの弱さを見つめて理解することで、本当は自分がどうしたかったのか、どうするべきだったのかを自問する。そして、ここでは弱さを必ずしも捨てる必要はない。「自分は弱さを持っている」と自覚した上で、それと共に生きていく。これを本論では「受け入れ」と定義する。一方、「耐え」は弱さと対峙しない。認識も無視もせず、ただ“それ”から受ける辛さを抱える。特別悲観的になったり、怒ったりすることも必要としない。いつか、何らかの慈悲を受けら

れる未来が唯一の希望なのだ。これを「耐え」とする。この二つの手法は、弱さを克服することが容易でない人々がとるべき手法として示すことができるだろう。

本研究では、「弱者男性」に注目している杉田俊介の引用を何度か行っている。杉田は、自らも「弱者男性」だとした上で、当事者研究に近い形で「弱者男性」をネガティブに語る。著書『男が辛い！ ―資本主義社会の「弱者男性」論―』では、「『弱者男性』たちは、資本主義的なシステムの矛盾によって痙攣状態にある。」として、そうして発生した“自己責任ではない怒り”を正しい敵に正しくぶつけろと指南した。また、「あらゆる救済からも承認からも見放されて、「つらさ」の中に留まり続けること、それがそのまま、男のプライドならぬ、「弱者男性」たちの尊厳(dignity)になるだろう。」とも述べた[杉田俊介, 2022]。「怒り」の発生を仕方のないものとして捉えることは、「弱者男性」を苦しめる「男らしさ」を再度彼らに押しつけてしまっているため是認できない。しかし「辛さの中に留まり続けること」は、上記で述べたチェーホフによる「耐え」の対処法と同意である。それを「弱者男性」たちの尊厳と呼ぶにふさわしいかは別として、「耐え」は、一度に大きな力を必要としないため、自らの尊厳を失ってしまいそうな人にとって適解である対処法だといえる。

また、杉田は著書を通して、自らを含めた「弱者男性」たちに、誰とも比較せず、競争せず、自らの中にある弱さを認め受け入れることで、外へ向かう攻撃性を収めようと訴える。そして、攻撃せず、ギリギリのところまで踏みとどまる自分を自分で肯定しよう、尊重しよう、尊厳に値するからと綴る。他者比較を伴わず、自らを認めること、この行為は先ほどの「受け入れ」に近い。仮に、弱さを全て受け入れて生きることができたなら、彼らの生きづらさは解消されるかもしれない。だが、ギリギリのところまで踏みとどまっている彼らに、向き合う余裕や受け入れる心のスペースが残っているだろうか。従って、「受け入れ」は理想的な対処法ではあるものの、実践する場合においては難易度が高く見受けられる。

ここで、先行研究として引用した杉田の「弱者男性」語りに対する反論を述べておきたい。杉田は、著書において「弱者男性」を自称し、自らの弱者性と向き合うことを実践しているが、それ故に「弱者男性」を卑下した語りが多い印象を受ける。杉田の述べた「自らの弱さを受け入れ、外へ攻撃を向けないようにしよう」、「攻撃せず、ギリギリのところまで踏みとどまる自分を自分で肯定しよう、尊重しよう、尊厳に値するから」という文章からは、「弱者男性」の中に攻撃性や暴力性がごく自然に存在しており、それが他者へ向きやすいという考えが読み取れる。これは不本意な禁欲主義者である「インセル」の存在などを加味して綴られた文章であると推測できるが、「弱者男性」を一括りにし、弱さと攻撃性を直結させることは「弱者男性」へのネガティブな偏見を助長させる恐れがあるため、筆者は推奨しない。第2章で明らかとなった「弱者男性」へのネガティブイメージを払拭するためにも、「弱者男性」というラベルは彼らの連帯と改善のために働くものとして用いられるべきではないだろうか。

第5章 「弱者男性」の展望

第1節 「弱者男性」からの脱却は必要か

これまで本稿では、「弱者男性」というキーワードのもと、「男らしさ」や男性性の分析、言説調査・表象分析を行ってきた。最終章では「弱者男性」とは問題なのか、つまり、男性は「弱い」状態から脱却すべきものなのかという論点を提示し、彼らの展望について考察す

る。

現代の資本主義社会において、すべての人が強者となることは不可能である。あらゆる要素において格差は起こり、そこには必ず強者と弱者が存在してしまう。そして、重ねての記述になるが、本論で扱った「男性」はそのジェンダー故に強さが誇張され、弱さを表出しにくい。また、強さを持たない男性たちの生きる環境が整っておらず、結果的に「弱者男性」にとって生きづらい世の中になってしまっている。

ここで新たな問題提起を行う。「弱者男性」たちはその「弱者」という状況から脱却すべきなのかという問いだ。もちろん、「弱者」とされる要素そのものが、彼らを苦しめているのであればこれは解決すべき問題である。たとえば、経済的困窮やコミュニティからの疎外などに関しては、性別にかかわらず、社会的・制度的に解決に取り組む必要があることは論を俟たない。だが、この問いに関して、筆者は男性が生きづらいつと感じる根本的な原因は、彼らが「弱者」とされる状態(貧困、非モテなど)であることではなく、男性が「弱さ」をもつことをネガティブに捉える規範であると考え。よって、筆者は「弱者男性」そのものは問題ではなく、男性が「弱い」ことそのものから脱却する必要はないと考える。

第2節 「弱者男性」の生きづらさと向き合う

多様な人々が存在する中で、人は誰しも長所と短所、強さと弱さを併せ持つ。そのなかには、改善のしようがなくどうにもならない短所もあるだろう。だがそれは短所であると同時に、一個人が持つ個性である。また、短所、或いは欠点(=弱者たり得る要素)を消し去ってしまうことは、表裏一体の長所を消してしまうことにも繋がりがかねない。であれば、ネガティブな要素をなくすのではなく、ネガティブ要素が生きづらさの理由になってしまう固定観念を変えていくことが重要ではないだろうか。人々が抱える苦しみや辛さを、いわゆる「男らしさ」のような性を理由とした規範にとらわれず、個人の声として社会に表出させ問題提起できる構造が必要だ。本論で取り上げた「弱者男性」は「生きづらさを抱えた人々」の一角にすぎないが、こうして一つずつ問題提起を行い、社会全体が個人の生きづらさに目を向けていくことこそが、「多様性の時代」を生きる我々に求められていることではないだろうか。

おわりに

本研究では、女性主体である現代のフェミニズム運動が分断やバックラッシュを引き起こしている現状から、男性に着目し、「なぜ日本社会では男性特有の生きづらさが生じているのか。男性たちを苦しめているものは何か。」という問いを設定した。第1章では、公式統計や先行調査の数値的データを用いて、日本における男性の特権的立場を示した上で、それに伴う「男らしさ」が男性たちに生きづらさを抱えさせていることを明らかにした。次ぐ第2章では、「男らしさ」に苦しめられ、生きづらさを抱える「弱者男性」という言葉に着目し、この言葉の背景や彼らに抱かれるステレオタイプについて整理した。第3章では、第2章にて登場した「弱者男性」の実態により深く迫るため、彼らの恋愛や結婚について、言説分析やデータ分析を基に考察した。そして第4章において、自らの「弱さ」を語る事が難しい男性たちの声に耳を傾けるため、男性の「弱さ」に向き合うことをテーマとした映画『ドライブ・マイ・カー』の表象分析を行った。最終章である第5章では、これまでの章

を踏まえた上で、「弱者男性」はどうあるべきか、我々は男性の生きづらさとどう向き合うべきかについて論じた。

本研究で取り上げた男性の「弱さ」や「弱者男性」については、未だ社会問題として議論される機会が少なく、彼らの生きづらさを改善するにはもう少し時間が必要になるだろう。だからこそ、本研究が誰かの目に留まり、男性性について考え、男性に課せられた「男らしさ」の呪いに意識を向けるきっかけとなれば幸いだ。そして、本来の意味でのジェンダー平等や「誰もが生きやすい社会」を目指す一歩になることを願って本論文の結びとする。

（以上、32,732字）

【参考文献】

- AntonPavlovichChekhov, 浦雅春. (2009). ワーニャ伯父さん/三人姉妹. 光文社古典新訳文庫.
- MaslowHAbraham. (1943). A Theory of Human Motivation. Psychological Review.
- SONY. (2020年11月4日). 女性のエンパワーメント加速のための民間企業アライアンス「EMPOWER」にアドボケートとして参画. 参照先：SONY: https://www.sony.com/ja/SonyInfo/diversity/report/05_42.html
- World Economic Forum. (2022年7月13日). Global Gender Gap Report 2022. 参照先：Global Gender Gap Report 2022: <https://www.weforum.org/reports/global-gender-gap-report-2022/>
- ほくらの非モテ研究会. (2020). モテないけど生きてます 苦悩する男たちの当事者研究. 青弓社.
- リクルートホールディングス. (2022年2月8日). リクルートホールディングスCEO、「女性のエンパワーメント原則（WEPs）」に署名. 参照先：リクルートホールディングス：https://recruit-holdings.com/ja/newsroom/20220208_001/
- 阿部恒久, 大日方純夫, 天野正子. (2006). 男性史1 男たちの近代. 日本経済評論社.
- 伊藤 南美. (2021年10月5日). 2021年のマッチングサービス・アプリ利用経験者は78.2%、昨年と比べて21.1ポイント増加. 参照先：MMD研究所：<https://onl.tw/UsbljBp>
- 伊藤公雄. (1996). 男性学入門. 作品社.
- 一般社団法人Lean In Tokyo. (2019年11月6日). 男性が職場や学校、家庭で感じる「生きづらさ」に関する意識調査. 参照先：LEAN IN NETWORK: <https://leanintokyo.org/20191106press-release/>
- 夏目誠. (2008). 出来事のストレス評価. 精神経誌(2008) 110巻 3号, 182 - 188.
- 岩上真珠. (2013). ライフコースとジェンダーで読む家族. 有斐閣.
- 宮台真司, 辻泉, 岡井崇之. (2009). 「男らしさ」の快楽 ポピュラー文化からみたその実態. 勁草書房.
- 経済協力開発機構(OECD). (2020). How's Life in Japan? 経済協力開発機構(OECD).
- 厚生労働省. (2013). 平成25年版 厚生労働白書. 厚生労働省.
- 厚生労働省. (2022年12月28日). 女性活躍推進法特集ページ（えるほし認定・プラチナえるほし認定）. 参照先：厚生労働省：<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000091025.html>

- 厚生労働省. (2022年7月30日). 令和3年度雇用均等基本調査. 参照先: 厚生労働省:
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-r03/02.pdf>
- 荒川和久. (2017). 超ソロ社会「独身大国・日本」の衝撃. PHP研究所.
- 国立社会保障・人口問題研究所 人口動向研究部. (2013). 出生動向基本調査. 国立社会保障・人口問題研究所.
- 黒川みどり. (2006). 男性の自己変革への模索. 著: 阿部恒久, 大日方純夫, 天野正子, 男性史1 男たちの近代 (ページ: 202). 日本経済評論社.
- 山田昌弘. (1996). 結婚の社会学 未婚化・晩婚化はつづくのか. 丸善株式会社.
- 渋谷知美. (2001). 「フェミニスト男性研究」の視点と構想. 日本社会学会.
- 上野千鶴子, 江原由美子. (1995). 日本のフェミニズム 別冊 男性学. 岩波書店.
- 杉田俊介. (2021年4月27日). 「真の弱者は男性」「女性をあてがえ」…ネットで盛り上がる「弱者男性」論は差別的か? 参照先: 文春オンライン: <https://bunshun.jp/articles/-/44981>
- 杉田俊介. (2022). 男がづらい! —資本主義社会の「弱者男性」論—. 株式会社ワニブックス.
- 正岡寛司. (1994). 結婚のかたちと意味.
- 村上春樹. (2014). 女のいない男たち. 文藝春秋.
- 多賀太. (2022). ジェンダーで読み解く 男性の働き方・暮らし方. 時事通信社.
- 男女共同参画局. (2010). 地域における相談ニーズに関する調査. 男女共同参画局.
- 男女共同参画局. (2022年12月2日). 政治分野における男女共同参画の推進に関する法律. 参照先: 内閣府 男女共同参画局: https://www.gender.go.jp/policy/seijibunya/seijibunya_law.html
- 男女共同参画局. (2022年6月). 男女共同参画白書 令和4年版. 参照先: 内閣府 男女共同参画局: https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r04/zentai/html/honpen/b1_s01_01.html
- 智子飯野. (2018). 男性学・男性研究と今日の男性問題についての考察. 実践女子大学.
- 田中俊之. (2015). 現代日本社会における「男性問題」. 変わりゆくオトコ達 ~男性市場の変化を読み解く~.
- 藤田直哉. (2021). 自己の解放へ向かう、新しい「弱者男性」論. 朝日新聞デジタル.
- 内閣官房 新しい資本主義実現本部事務局. (2022). 男女間賃金格差の国際比較. 内閣官房.
- 内閣府男女共同参画局. (2022). 世界経済フォーラムが「ジェンダー・ギャップ指数2022」を公表. 共同参画 令和4年8月号, 11-12.
- 落合恵美子. (2019). 21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた 第4版. 有斐閣.
- 濱口竜介 (監督). (2021). ドライブ・マイ・カー [映画].
- 濱口竜介. (2022年2月25日). 『ドライブ・マイ・カー』映画監督・濱口竜介にインタビュー。村上春樹の小説を映画化する時に最も困難なこと. (野村訓市, インタビュー質問者)